祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報　第84号

てんまてんじん

御文庫講創立三百年……2頁
令和五年・天神祭……4頁
天満の天神さんと私(5)
花外楼 女将　徳光正子……6頁
境外の天満宮・天神祭(四)
クラシック音楽の天神祭……7頁
てんまんGOOD……7頁
浪花百景　浴衣の模様考……10頁

表紙解説

「天神像」

大阪天満宮所蔵　紙本木版墨摺
縦一〇四・九cm　横三八・〇cm
江戸時代後期　一幅

松浦　清（大阪工業大学教授）

木版による墨摺りの天神像です。黒の袍を身につけて冠を被り、左手で持つ笏の上部を右手で抑えるように構える束帯姿は、天神像ではしばしば目にする表現です。頭上に御簾と帷を、また、繧繝縁とみられる上畳に円座を敷く形式も、神像としての威儀を示すものです。

一方、尊容は個性的で、本社報の令和三年新春号外でも紹介した大阪天満宮所蔵「光格天皇寄進像」によく似ています。「光格天皇寄進像」は土佐光孚が描き、光格天皇が仁孝天皇に譲位された文化十四年（一八一七）の後、天保十一年（一八四〇）に大阪天満宮に寄進された天神画像です。それには御簾も帷もなく、また、掘塗という伝統技法で描かれていた袍の衣文線は本図では粗略に表現され、表袴に描かれていた窠に霰の文様や四つ目菱文を配した円座にも省略が目立ちます。これらの表現は、本図が「光格天皇寄進像」の写しであることを示しています。

さて、本図の際だった特徴は、画面上部に画賛のように「北野天神融通念仏行者示現文」を掲げることでしょう。それは次の記述です。

天神本地身／十一面薩埵／為度衆生故／示現天神体／我本師弥陀／為報恩頂戴／毎日称名号／満一百八遍／以是念仏功／悉授与於汝／汝行三千遍／亦授与於我／融通功徳力／甚深亦甚深／如是修行者／決定生極楽
此板本在山門楞厳院安楽谷
応永廿二年八月十五日依良鎮上人
所望染筆訖　七観音院　比丘聖意（花押）

この「北野天神融通念仏行者示現文」とは「融通念仏縁起絵巻」の詞書からの抜粋です。正確には応永二十四年（一四一七）制作の清涼寺本「融通念仏縁起絵巻」とそれ以降の模本に共通する詞書の一部です。

そもそも「融通念仏縁起絵巻」は融通念仏宗の宗祖良忍の事績と融通念仏の霊験譚を絵画化した絵巻物です。良忍は趣旨に賛同する者が念仏の功徳を融通し合って皆極楽往生するという一種の念仏運動を広めた平安後期の僧侶です。念仏信仰つまり阿弥陀浄土信仰がなぜ天神画像に記載されているのでしょうか。

それは「北野天神融通念仏行者示現文」の冒頭に示されるように、天神の本地を十一面薩埵つまり十一面観音菩薩とする信仰によります。本地とは本体といった意味合いの仏教用語で、十一面観音菩薩は衆生救済のために天神という「仮」の姿で出現するのであって、その本体は仏教の十一面観音菩薩であるという垂迹思想と呼ばれる仏教中心主義が背景にあります。

十一面観音菩薩は観音菩薩の一種であり、阿弥陀如来の補佐役として衆生救済に大きな役割を果たすことが期待されました。この「北野天神融通念仏行者示現文」はそれを示すものです。

融通念仏信仰は、明徳二年（一三九一）に「融通念仏縁起絵巻」が木版化されたことによって大きな高まりを見せます。この明徳版本の肉筆着色による豪華版が清涼寺本「融通念仏縁起絵巻」です。木版化はその後も五回、合わせて六回実施され、融通念仏信仰の強靱さを示すことになります。

これに関連するのが本図の画面下の区画に示された文字列です。分量が多いので全文の掲載は割愛しますが、その要点を示せば次のようになります。この天神像は菅公の子孫六世の菅原定義の夢中に現われた天神を写した画像と伝承され、近年その模刻が現われたことから、天保十四年に楽山が再刻し、清涼寺本「融通念仏縁起絵巻」に記す偈（詩句形式の教理）を題したということです。

楽山は本文末に「河内国八尾清慶寺蔵板」と記すとおり、八尾の清慶寺の僧侶です。天保十五年（一八四四）に「天保版楽山本」として知られる「融通念仏縁起絵巻」を開版し、江戸後期における融通念仏信仰の興隆に尽力しました。楽山は光格天皇崩御後に出家した中宮（皇后）すなわち新清和院の病を祈祷して治したと伝えられています。

従来、融通念仏縁起絵巻と天神信仰との関係は知られていましたが、本図は掛幅形式の単独の天神像と江戸後期の融通念仏宗との関係を示す具体例として注目されます。

「大阪書林 御文庫講」創立三百年
講演会 や ブックフェア

今年は、「大阪書林 御文庫講」の創立三百年にあたります。「書林」とは現代の出版社(兼、書店)を言い、「御文庫」は書庫のこと、「講」は氏子集団を指します。

「大阪書林 御文庫講」は、明治四十三年(一九一〇)に「住吉御文庫講」と「天満宮御文庫講」が合併し成立したのですが、両講の起源は江戸中期の享保年間に遡ります。

享保八年(一七二三)、大坂・京・江戸の書林(出版社、兼書店)が、住吉大社に御文庫(書庫)を寄進し、まもなく「住吉御文庫講」を結成しました。続いて、享保十二年には当宮でも御文庫の建設が始まり、享保十五年に「天満宮御文庫講」が結成されました。以後、両講は、所属の書林の初刷(初版本)を中心に、多くの書籍を両御文庫に奉納されてきました。

しかしながら、当宮の御文庫は、天保八年(一八三七)の大塩平八郎の乱によって類焼し、その蔵書も灰燼に帰しました。まもなく、御文庫は再建され、蔵書の奉納もこれ以後の初刷だけに止まらず、大塩の乱以前の書物も奉納され、今日に至っています。

明治四十三年の両講合併以降は、毎年五月に住吉大社で、十月に当宮で書籍の奉納、蔵書の曝書(虫干し)をご奉仕されています。

■記念講演会

去る九月十五日には、創立三百年記念の講演会が、中之島の大阪市中央公会堂・大集会室において開催されました。

藤波優講元の開会の挨拶の後、旭堂南海先生が、住吉御文庫講の成立について創作された講談をお読みになり、続いて、住吉大社の小出英詞権禰宜が、住吉大社の特性と御文庫の歴史をお話になりました。

続いて、当宮文化研究所の高島幸次所長が、江戸時代の裕福な大坂町人たちの「有徳思想」が、御文庫を支える下地となっていたことを説きました。有徳思想とは、室町時代に生まれ江戸時代にも受け継がれた思想で、「豊かな者は徳(恩恵)を施さねばならない」という社会心理をいいます。この思想が、御文庫への書籍奉納の下地となっていたのです。

その後、落語家の桂文我師匠の司会で、藤波講元、南海先生、小出権禰宜、高島所長による座談会に移り、御文庫の多様な文化的意義について談笑、話題は天神祭にも及びました。

■懇親会

講演会終了後には、公会堂の堂島川対岸の中之島ラブセントラルで懇親会が開かれました。

懇親会は、住吉大社の神武磐彦宮司のご挨拶と乾杯の御発声の後、歓談タイムとなり、その間には文我師匠の落語本についてのお話もあって、和気藹々の雰囲気が漂いました。最後には当宮の寺井種治宮司の挨拶で中締めとなりました。

■ブックフェア・パネル書籍展示

創立三百年の記念企画としては、右の講演会の他にも、梅田の紀伊國屋書店において御文庫講の出版社によるブックフェアが開催されました(九月六日~十九日)。

また、東大阪市の大阪府立中央図書館ではパネル・書籍展示(十月十九日~二十九日)、大阪中之島図書館でもパネル展示が予定されています(期間未定)。

大阪書林御文庫講名簿

大阪大学出版会／萌書房／㈱弘文社／㈱新興出版社啓林館／清文堂出版㈱／㈱創元社／㈱増進堂・受験研究社／㈱竹林館／東方出版㈱／㈱永井書店／㈱日本実業出版社／日本文教出版㈱／㈱燃焼社／ひかりのくに㈱／ＢＬ出版㈱／㈱丸元／㈱養徳社／㈱宮井書店／㈱ユーゴー書店／門脇孝子／木野村章／大阪出版協会

令和五年　天神祭
四年ぶりの船渡御

天満天神七夕祭

本年の天神祭は、四年ぶりに本来の姿で斎行することができました。新型コロナ感染症が急拡大した令和二年の天神祭では、陸渡御・船渡御・奉納花火などの神賑行事は中止を余儀なくされたため、代わりに本殿における神事「本宮祭」をインターネットライブ配信させていただきました。

翌三年も感染拡大は収まらず、神賑行事は中止し、宵宮祭・鉾流神事を中心とした神事のみを斎行しました。

宵宮祭

そして昨年は、諸神事の斎行に加えて、陸渡御の再開を試み、厳しい感染防止のもとに、例年は三千人を超える奉仕者数を約千人に制限して斎行いたしました。

そして本年は、船渡御も再開し、神事および神賑行事をコロナ前の姿で斎行しましたところ、コロナ禍が完全に終息したとは言えない状況だったにも関わらず、コロナ以前よりも多い一四〇万人近い皆様に拝観していただきました。皆様が、天神祭を如何に楽しみにしていただいていたかを再認識させていただくことになった次第です。

鉾流神事

以下、本年の天神祭の様子をご紹介いたします。

先行音楽隊

御鳳輦

猿田彦

総奉行

奉納花火

船渡御

牛曳童子の宮入

三ツ屋根地車の宮入

YouTube大阪天満宮公式チャンネルにてダイジェスト映像をご覧になれます。

天満の天神さんと私（5）

花外楼 女将
徳光 正子

徳光正子さん（右）と御両親

子供の頃は、土佐堀川のほとりで暮らしていた。中之島公園はバラ園ではなく噴水があって川風は心地よく、天神祭の日には表通りではビジネスマンが袴装束で闊歩し川向こうには花火が上がり北浜界隈も賑やかだった。日頃は厳しかった祖母に、ラムネの入っている可愛いウサギのお菓子を屋台で買って貰った事を今も懐かしく覚えている。

数々の思い出はあるが、天神さんと言えば天神祭。水の都にふさわしい船渡御、そして御迎え人形である。御旅所周辺の町々が、それぞれに船を飾り付け大川を上り御旅所まで導いたとか。また江戸時代末期には五十余体を数えた御迎え人形も現在は十六体と聞く。

大阪府の有形民俗文化財に指定された貴重な御迎え人形が毎年、花外楼にやってくる。玄関ロビーに人形が納まると、まるでお客様をお迎えするかの様で堂々と凛々しい姿には圧倒されて目を見張る。御衣装は立派だが、所々に綻びていたり錦繍（きんしゅう）がほつれていたりする所も寧ろ時代を感じて趣がある。立派な人形は、神様をお迎えする町人たちの熱い信仰の賜物だったのだろう。手に触れるほど身近で対面できるのは感動である。毎年変わる人形をお客様も楽しみにしておられる。中には若い部下を連れ歴史を説明される方もいる。しかし意外と詳しい歴史はご存知ではない方も多く、『御迎船人形図会』をコピーして差し上げると喜ばれる。

今年は「安倍保名」だった。歌舞伎や浄瑠璃にもなった物語「恋しくば尋ね来てみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の舞台が思い出されて感慨もひとしお。両親もお祭りが大好きだった。その日ばかりは私たちも浴衣でお出迎え。どんどこ船がやってくると、大阪締めで挨拶。水の都、水上の祭典「天神祭」は、やはり大阪の風物詩である。

浪速菅廟吟社詠草

雪祓　松村暁二撰

四月課題　清明郊行

苔菴　揚田　崇徳　三原市

清明潤物雨聲微　曳杖村郊綠正肥
更想山中杏花發　握錢欲敲酒家扉

《訓読》清明物を潤す、雨声微（かす）かなり、杖を曳けば村郊緑、正に肥ゆ。更に想う山中杏花発くと、銭を握り敲かんと欲す酒家の扉。

《通釈》清明の季節は雨も微かに降り物をしっとりと潤している、杖を曳けば（自分を杖に擬えている）村里は緑が豊である。きっと山に入れば杏の花が咲いているだろう、しかしわしは小銭を握って酒屋に行くのである。

五月席題　田家野望

鵬城　北野　修司　大阪市

村南村北接青穹　田舎新畦灌注同
野靄淡籠農事晩　愛孫告飯喚蓑翁

《訓読》村南村北青穹に接し、田舎新畦の灌注を同じうす。野靄淡く籠む農事の晩、愛孫飯を告げて蓑翁を喚ぶ。

《通釈》村里の南も北も良く晴れて青空に接しているようだ、田舎の田圃では灌水したであろう。夕焼けが淡く農事を終えるころ可愛い孫が夕食ですよと言ってきた。

六月課題　竹亭清談

牛道　高田　健一　尼崎市

蛙聲閣閣古池潯　風起自涼脩竹林
亭主白須青眼在　親交三帙共彈琴

《訓読》蛙声閣閣たる古池の潯（ふち）、風起り自から涼し脩竹の林。亭主白須にして青眼の在り、親交三帙　共に琴を弾く。

《通釈》蛙の声がコウコウとなく古池のほとり、風が吹いて涼しくなる竹林。竹亭の亭主は白い鬚で、優しく人を迎えてくれる。この主人との付き合いは三十年一緒に事をかき鳴らすのである。

九月課題　中秋對月

粕春　中島　結樹　川崎市

飛光千里照雲甍　書院開窓對月明
天地靜閑秋思滿　案頭深憶舊山情

《訓読》飛光千里雲甍を照らす、書院の窓を開きて月明に対す。天地静閑秋思満つ、案頭深く憶ふ旧山の情

《通釈》中秋の明月は千里の遠くより高殿の大屋根を照らしている。書院の窓を開けて満月を見る。天地はなんと静かなことであろうか、秋思の思いが盈のである、案頭（机の上）には山月を思わす詩書が情をかもし出すのである。

境外の天満宮・天神祭（四）

クラシック音楽の天神祭『大阪俗謡による幻想曲』

今夏、天神祭は四年ぶりに本来の姿で斎行されました。境内外に鳴り響く地車囃子や天神講獅子の笛の音に、多くの方々が、大阪の夏が帰ってきたと実感されたのではないでしょうか。

そこで、今回はクラシック音楽における天神祭をご紹介しましょう。

『大阪俗謡による幻想曲』は、大阪に生まれ育った作曲家・大栗裕（一九一八～一九八二）が、昭和三十一年（一九五六）に作曲した作品です。

現在では吹奏楽による演奏の機会が、多い楽曲ですが、元々は前世紀の日本が誇る名指揮者・朝比奈隆（一九〇八～二〇〇一）の演奏旅行での持ち曲として作曲されたオーケストラ作品でした。

曲はまず、うだるような夏の大阪を表現した、アンダンテの序奏から始まります。そして早速、本物の「当り鉦（チャンチキ）」を叩いての地車囃子（二分四十三秒頃から）に移ります。その後、天神講獅子の獅子囃子もピッコロにより演奏され（五分三十七秒頃から）、クライマックスは宮入りさながら熱狂的に曲を結ぶ、言わばクラシック版・天神祭とも言うべき作品となっています。

下野竜也氏と大阪フィルハーモニー交響楽団による演奏が動画投稿サイトYouTubeに投稿されています（下記QRコード参照）。ぜひ、もう一つの天神祭をお楽しみください。

オリジナル楽曲 てんまんGOOD!

去る六月十七日、天神祭に先駆けて、当宮職員が結成したユニット「てんまんGOOD!オールスターズ」が、オリジナル楽曲『てんまんGOOD!』をリリースしました。

お陰様で、天神橋筋商店街やFM各局などでも流して頂き、その軽快なリズムと夏らしいノリノリメロディーも相まって老若男女からの評判も上々でした。天神祭の模様をダイジェスト版に編集したYou Tubeムービーでも BGMとして用い、各方面から「祭の熱気が伝わった」「動画と音楽がマッチして祭の素晴らしさを思い出し感動した」などの感想も多く頂いております。

そして、この楽曲『てんまんGOOD!』は、当宮が新たに地域活性化プロモーション企画として立ち上げた「てんまんGOOD!プロモーション」にも密接に関係するもので、今後は氏地の商店や企業とともに「地域を元気にするプロモーション企画」として展開してまいります。

具体的には「てんまんGOOD!」マークを冠につけた商品やサービスを展開し、毎月二十四・二十五日を「てんまんGOOD!デー」として、境内の特設会場での商品販売や、商店街の協賛店とのスタンプラリーなど、氏地にお住まいの方々は勿論、近隣や遠方からもどんどん商店街や市場へお客様に足を運んで頂き、その結果、皆んながニッコリできるよう展開してまいります。

来年の天神祭、再来年に開催される大阪万博、そして、令和九年に迎える菅原道真公御神退千百二十五年式年大祭に向けて、氏子の皆様や協賛して頂く商店・企業・団体の皆様と当宮が一丸となって前進してまいります。

楽曲「てんまんGOOD!」や「てんまんGOOD!プロモーション」についてのお問い合わせは、QRコードからご照会ください。

youtube 動画はコチラから

歌詞とお問合はコチラから

社務所　電話番だより
よくあるお問い合わせ
『六曜』について

最近は、「六曜（先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口）」を記したカレンダーが少なくなっていますが、このうちの「大安」や「仏滅」などは、まだまだ日々の生活の中で意識されているようです。

「六曜」の起源や根拠については明確な資料もなく、どちらかといえば迷信に近いようなものです。「仏滅」には婚礼などを避けるとか、「友引」に葬式を営むことを忌むとか言われますが、それは神道とは関連なく、また仏教とも接点がないのです。結婚式は「大安」がよいと言うのも、字面からの印象でしかないのです。

その起源は中国にあり、唐の天文学者・李淳風（六〇二～六七〇）が著した『六壬承訣』に「大安・留連・速喜・赤口・将吉・空亡」と記されているのが起源だとする説があります。

日本には鎌倉時代に伝来し、江戸時代に広まりました。明治五年に太陽暦が採用された際には、吉凶を記す暦注は迷信であるとして禁止されました。しかし民間ではその後も存続しており、第二次世界大戦後は政府による統制もなくなったことから、一般に流通するカレンダーにも記載することが多くなったようです。根拠のない迷信だといいながら、これに影響される人も多いのは、群集心理というか、日本人の習性かもしれませんね。

当宮でも「六曜」についてお問い合わせを受けることがありますが、「六曜は神道とは関連がありませんのでどうぞお気になさらずお参り下さい」とお答えするようにしています。なかには「仏滅は混雑しないていいから」などと逆に利用される方もいらっしゃいます。そのため、神社内の事務作業などには「六曜」を参考にする場合もあります。

殊更に気にしたり、重大事項の判断に使ったりすることはお勧めしませんが、縁起担ぎなどの参考にされることは結構かと思われます。

大阪天満宮献詠　風月社

令和五年四月～九月
秋思祭（九月二十九日）

四月兼題　雲雀

幾重にも春を重ねて山遠く
　光りの中へ雲雀とびたつ
　　南口　一二美

舞ひあかりさえつる雲雀花の世を
　汝の目を借り眺めやりたし
　　鈴木　敬子

五月兼題　日傘

夏つよみ日傘にふかく影つくり
　ゆき交ふ人らはつらつと見ゆ
　　佐野　秀子

咲き継ぎしアンネの薔薇の眩しさに
　日傘傾け立ちつくしたり
　　乾　恵子

六月兼題　紫陽花

満開の山あぢさゐの一株に
　道行く人も足止めたり
　　大北　滋保

小道沿い時のうつりに七変化
　露のひかれる梅雨の紫陽花
　　忠津　清治

七月兼題　虹

桂浜の五色の砂に坐しをれば
　海をまたぎて虹の現はる
　　家治　綾子

過疎すすむ村に大きな虹かかり
　峡の青田をだきかかへをり
　　北岡　由紀子

八月兼題　花火

夏くれは今は亡き人偲はるる
　肩寄せ眺むるあの遠花火
　　伊藤　涼子

たまゆらのこより花火のゆるる玉
　たゆたび落つるさがをはかなむ
　　坂井　田礼子

九月兼題　蜻蛉

空を飛ぶ蜻蛉取する弟が
　遊んだ野原遠き想ひ出
　　中瀬　央子

秋思祭兼題　鶏頭

鶏の息使い聞くひとうねの
　鶏頭の赤ゆれる夕暮れ
　　松村　曉二

広報室だより①

「十三詣り」

私たちは、人生の節目々々に神社にお詣りします。初宮詣り・七五三詣り・十三詣り・成人式・厄年のお祓い・結婚式などがありますが、この内の「十三詣り」は、満十二歳（数え歳十三歳）を迎えた少年少女がお詣りし、福徳と英知を授かり、厄を祓う古くからの習慣です。

満十二歳ということは、生まれた年の十二支が初めて一巡する年に当たります。お子様の十二支が巡ってきた年のお誕生日を目安に、お詣りください。

天満宮スカウト 活動日誌

◆ボーイスカウト大阪第九十八団

四月　入団上進式を天満宮境内で開催、新しい仲間を迎えての各隊オリエンテーションが開かれた。ビーバー隊が訓練ハイキング、万博公園にてスカウトの基本動作を学びつつ自然に触れる。

五月　カブ隊が科学的な実験を実施、人工イクラやスライムなど生み出すことに成功した。

六月　団行事としてスカウト育成会総会を開催、天満宮スカウトの活動をスライドショーを用いて紹介した。ボーイ隊はロープワークや立ちかまどの構築などのスカウト技能の強化に努めた。

七月　天神祭が四年ぶり完全な形で斎行、ボーイ隊も子どもどんどこ船に乗り、天神祭を盛り上げた。

八月　神社スカウト全国大会が伊勢の地にて開催、全国より集まった千名を超えるスカウト・指導者たちと交流した。初日は神宮徴古館を見学、二日目は内宮へ参拝行進、謎解きラリーで史跡探訪が行われた。三日目の閉会式では参加スカウトのダンスや、相川七瀬さんのコンサートなどで盛り上がった。

◆ガールスカウト大阪府第八十一団

六月　ブラウニーは夏の行事に向け体力（忍耐力？）をつけるために「大阪七坂」をハイキング。大きいスカウトたちは、夏の伊勢での全国大会で着用する団Ｔシャツを作成した。

七月　京田辺市野外活動センターで訓練舎営を行った。いつもの同年代のパトロール（班）ではなく、中高生と小学生合同パトロールで。親もとから遠く離れて暮らす寂しさや心細さを、年長のスカウトたちが上手く解決してくれた。

八月　全部門で伊勢全国大会に参加した。雨が降ったり止んだりの天気だったが、これまでの訓練の成果があり、楽しく過ごせた。神宮周辺での史跡探訪では、漢字の読めない小学一年生も、問題を読んでもらって、クイズの答えを考え楽しんだ。閉会式での相川七瀬さんのミニコンサートも、タオルを振り回しピョンピョン跳んでの大歓声だった。神事を含む開会式に始まり、神宮参拝、皇室より三笠宮彬子女王殿下の御臨席を仰いでの閉会式と厳かなプログラムにもしっかり取り組んだ。生活面では団体生活の中、食事への感謝の言葉が日に日にしっかり言えるようになった。最終日シニア・レンジャーは全国の友人たちと共に朝礼を取り仕切り、全国大会を終了した。帰阪までのひととき、忍者に扮し、遊んだ。次回の大会を、全国の友人との再会を思いながら帰宅の途についた。

浪花百景
天満天神
地車宮入
地車の曳き手の浴衣の紋様考

元大阪府立大学研究推進機構大阪検定客員研究員
湯川敏男

江戸末期（一部は明治初頭）の大坂の名所一〇〇景と、その作品名を五〇景ごとに記した「目録」二枚を合わせた『**浪花百景**』は、一〇二枚からなる木版多色刷りの風景画で、板元は「石和」こと、石川屋和助、絵師は、歌川國員、里乃家芳瀧、南粋亭芳雪の三人による競作です。

このシリーズの芳瀧画「**天満天神地車宮入**」（以下、「**地車宮入**」）の景は、筆者が『**浪花百景**』にのめり込む、契機となった作品です。平成二十六年（二〇一四）、大阪市立難波市民学習センターで催された、大阪まちなかカレッジで、当時大阪大学総合学術博物館の橋爪節也教授の講演「ふたたび『**浪花百景**』―絵師の描く幕末の大坂にタイムトラベルすると―」を受講する機会がありました。

この講演の中で、『**浪花百景**』の絵の中には、絵師や板元の遊び心や謎掛けが、そこここに潜んでおり、タイトルが書かれた色紙形（正方形）と、総タイトルや絵師名、板元名などが書かれた短冊形（長方形）の地模様の意味合いなど、分からないことが多々あり、『**浪花百景**』は、謎の宝庫であることを教わりました。特に、後述する「**地車宮入**」の画面に配された色紙形や短冊形の市松紋様の枠の中は、同じ地模様で統一されており、さらに、図に描かれた地車の曳き手の浴衣の柄と同一パターンのように見えるが、何の地模様か判明していないと教わり、その事が頭から離れなくなりました。

この地紋様について、筆者は、「源氏香」など、いろいろ横道に逸れましたが、最終的には、日本の家紋や袢纏の紋様などに使用されている、漢字を縦横同じ幅の線で正方形に紋様化した「角字」に辿りつきました。

この景の色紙型の紋様は、二種類の文字それぞれを斜め右下に一列に配置したデザインとなっており、画数の少ない文字は「石」の角字とすぐ判明しました。その後、残る画数の多い文字は「和」の偏と旁を左右入れ替えた異体字「咊」の角字と判明しました。なんと板元名の「石和」と解読できました。大坂の板元らしく、チャッカリ自身の板元名を潜めていました。

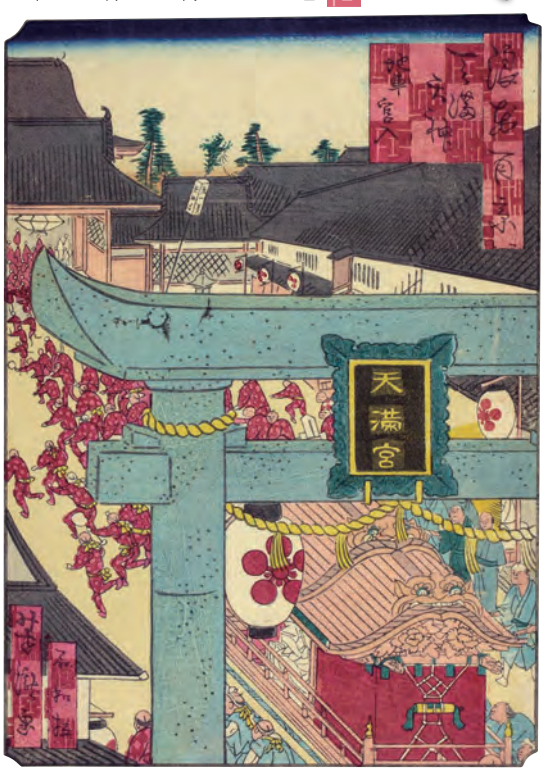
角字「石和」

このことについて、筆者は、平成三〇年（二〇一八）七月刊の大阪天満宮社報『**てんまてんじん**』第七四号に「『**浪花百景**』の隠された暗号を読み解く」と題して発表させて頂きました。

しかし、筆者は、実際の宮入の地車の曳き手の浴衣の柄には、この「石和」とは別の、地車の出身講元名の角字が染め抜かれているものと愚考し、今回は、紙幅の関連で詳細は省略しますが、地車の出身講元名を比定するためのヒントを探しました。

この中で、「**地車宮入**」に描かれた地車は、堂島米市場社中の地車に酷似していることに気付きました。

堂島米市場社中の地車を描いた作品としては、大坂の風景・風俗などを一葉毎に描いた『**浪華勝槩（概）帖**』の西山完瑛画「**夏祭車樂**」や山本笙園画『**堂島地車図**』、この絵の元絵『**浪花浮世画壇松川半山翁遺稿**』などが



『浪花百景』の内「天満天神地車宮入」

あります。これらの図と「**地車宮入**」の地車正面大屋根の鬼板・破風・懸魚を比較すると、共通点が多々有り、同一の地車と推定できます。さらに、これらの図の地車の形状以外にも、曳き手の装束・色彩も「**地車宮入**」と共通点があり、そのため、「**地車宮入**」の地車の曳き手の浴衣の紋様は、堂島米市場社中と判る角字であった可能性がでてきました。

筌園・完瑛・芳瀧画

和漢の神社仏閣故事などの由来の経過年代をまとめた「嘉永五子新版」の松川半山画の『日本唐土 **二千年袖鑒（鑑）拾遺**』（以下、『**袖鑒拾遺**』）に「**浪花堂嶋濱地車**」の項があり、その中に堂島浜地車講の社中の装束の新調に関する記事があります。それによると「浪花諸社の祭礼に地車の出ること多しといへども天満祭に超ることなし、就中堂嶋の濱より出るものハ其人数一万有余をかくることなし、近くハ天保九年（一八三八）に出る所一万三百余人なりとぞ、右天保の人数をしるすハ呉服店において揃へ紅摺の浴衣等を誂らへし員数をもつて著すものなり」とあり、呉服店毎の浴衣などの誂えた反数が次の通り記されています。

天保九年四月　砂持（天満宮再建）

地車十五年（この「十五年」は、『**袖鑒拾遺**』が発行された嘉永五年（一八五二）から何年遡った事象であるかの経過年数が記載されている）

紅摺揃　四千五百反　下村
同幷浴衣　三千五百反　三井
彩摺揃　二千五百反　岩城

なんと、大塩の乱（三井、岩城ともこの乱で被災）の翌年には、もうこのような大量の浴衣などを新調できる大坂町衆のバイタリティに驚嘆するばかりです。また「紅摺揃」の装束はまさに「**地車宮入**」の地車を曳く講中の揃いの浴衣の色合いとも一致し、『**浪花百景**』の地車が堂島浜地車講の仕立てたものであることの左証となります。

また、同書解説部分の後半の箇所に「文政八　石畳へ　濱の字　そろへ　二十八年」の記載があります。ここでいう「石畳」とは、現在我々が「市松紋様」と呼ぶチェック柄で、この柄名は、この紋様の袴で舞台に上がり、人気を博した、江戸時代の歌舞伎役者・佐野川市松に因むものです。文政八年（一八二五）以降は、「石畳へ　濱の字」つまり角字は「濱」の字と判明しました。

角字「濱」

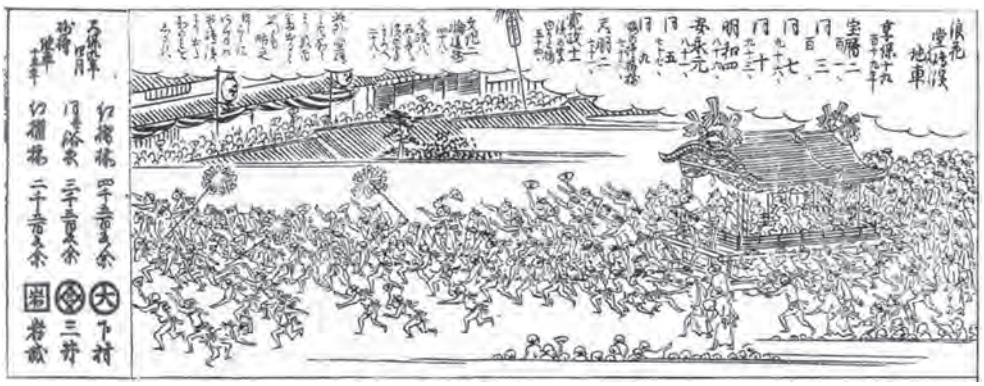
さらに、天保二年（一八三一）の安治川河口の「御救い大浚え」（この浚渫工事で浚えられた土砂を積み上げた築山が、のち天保山と命名される）の瓦版『**浪花大砂運衣裳附**』には、大坂市中の町内個々の法被などの衣裳の図が掲載され、説明が添えられています。

大砂運衣装「堂濱」

この図では、堂島浜仲間の法被部分の説明書きには「あひ地白」とあり、白地に藍染めで「堂」「濱」と染め抜かれて石畳（市松）状に配置されていたことが判明します。

角字「堂濱」

時系列にみると、天神祭の堂島浜の地車の衣装は、「紅摺揃」の浴衣で文政八年には、市松紋様で「濱」の角字一文字、この瓦版が発行された天保二年までの時期に、市松紋様に「堂」と「濱」の角字二文字になった可能性が明らかになりました。



浪花堂嶋濱地車（「嘉永五子新版 日本唐土二千年袖鑒拾遺」）※一部加工

広報室だより②

「御神水舎」開扉日（月三回）限定授与
『水御守（みずのみまもり）』

去る七月一日、当宮「御神水舎」の開扉の再開を祝して、心身共に祓い清める『水御守』の頒布を始めました。

表門を入って直ぐ右手の「御神水舎」では、毎月一日・十日・二十五日を開扉日として、御参詣の皆様に自由にご利用いただいていましたが、コロナ禍により令和二年から閉扉を余儀なくされていました。

しかし、本年から開扉を再開いたしましたので、それを機に毎月の開扉日だけに『水御守』を限定授与させていただくことになりました。

授与所で『水御守』をお受けになりましたら（初穂料二千円）、円形の木箱に入っている清め札（ヒバの木札）を「御神水舎」の御神水に浸してそのお力を取り込んだ後に、麻織御守袋に納めて「心身清浄」の御守りとしてお持ちください。

神楽「浦安の舞」の出張演奏

七月二十九日、ホテルニューオータニ大阪において、当宮の神職・巫女による神楽「浦安の舞」の演奏をさせていただきました。

これは、一般社団法人倫理研究所大阪府倫理法人会の設立四十周年記念式典に際し、祝賀の舞の演奏を依頼されたことによります。

同法人は、全国に約七百ヵ所の拠点を持ち、大阪府下では二十九拠点に約四千社を超える企業が在籍し、倫理の学びを深め、実践を続けることで、個人の成長と企業の繁栄を目指しておられます。

当日は約千人の参加者によって式典が執り行われ、祝賀と国家安泰を祈念して演奏させていただきました。「浦安の舞」をご存じなかった皆様も、厳粛な雰囲気の中、真剣な眼差しで見守られ、終了時には大きな拍手をいただくことができました。

第十一回 天神天満阿波おどり

八月二十七日の午後、今年で十一回となる「天神天満阿波おどり」が開催されました。

天神橋筋商店連合会と徳島県県関西本部、関西阿波おどり協会、などが実行委員会となり、当宮も協力している行事で、恒例の阿波踊りとして定着してきたようです。

当日は、関西で活動する九連約二百六十名の踊り手・囃子方、にわか連として一般有志の方も参加し、第一部は商店街での「流しおどり」、第二部は当宮境内での各連の「構成踊り」の奉納演舞、最後には参加者全員と観客拝観者も加わっての「総踊り」がおこなわれ、御本殿を取り囲んだ踊りの輪が熱狂の渦を巻き起こし、閉会の挨拶では全員で「大阪締め」をおこなってめでたく取り納められました。

大阪天満宮社報
てんまてんじん　第84号
令和5年10月20日印刷
令和5年10月25日発行
発行人　寺井種治
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041
大阪市北区天神橋2―1―8
TEL 06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社